

## 平和博の美術館を見て

黒田清輝

いつも私のよく云ふことであるですが、佛蘭西のサロンを見ての感覺であります、初て見た時は猶更のこと、毎年往て見る度に、場内に入ると、先づ非常に雄大な、快活な感覺が起る一番初めに私の見たサロンは、今の場所ではなく、シャンゼリゼと云ふ町の、日本で云へば凱旋道路とでも云ふか、巴里の有名な凱旋門から、元の王宮であつたチュイルリーの宮殿へ通じた大路で、チュイルリーは今公園で、それより先にルウヴル博物館がある、シャンゼリゼの大路は見事な並樹のある立派な大道路である。以前にはチュイルリーの公園に近い道路の南側に工業館と云ふ建物があつて、そこでサロンが開かれて居た。サロンに入ると、恰もパノラマを見る様で、全然違つた世界につき出された様な感じがした。しかもその世界は非常に優美で、そしておごそかであつた。俄に新たな世界、その世界は、我々の外で見て居る自然より以上の立派な自然を現はして、花にしても樹木にしても、人間にしても、いづれも皆な精選されたものであつた。先づ第一にさういふ感じが起つて、次に起る感じは繪と云ふ感じである。繪に依つて斯ういふ特殊な世界が出来たと云ふ考が次に出て来る。之は私の個人の感覺でありますけれども、私と同じ様に思ふ人も幾多あると思ふ。併し私の見た時代と今日とは、サロンの内容も違ひ、見る人の智識の度合が違ふから、今日彼地に在留する日本の畫家が如何なる感覺を懐くかは分りません。

兎に角畫といふもの、又展覽會といふものが、佛蘭西に於て、右様の感じを私に與へた。日本に於てはどうであ

るか、先づ文部省の展覽會は日本の最も立派な展覽會であるに拘らず、左程に、佛蘭西でサロンから與へられる感覺の半分も與へない。主もなる原因は建築の如何に基因することは思はれますけれども、作品の程度にも由ることはないでありませうか。

今度の平和博の美術館は、今日の技術の許す範圍に於て、最も美術に適當したところの陳列館を作り、現代の美術の粹を集めたものと思ひますが、之を見て、前に述べた、サロンに於ける感覺と如何なる差があるかと云ふことに、比較的研究を試みる考を以て觀察するは、非常に興味のあることと思ひます。それで此の觀察の結果、我々は尙一層どころではない、餘程奮發をせねばならぬと思ふのであります。之は獨り美術家の奮發ばかりではない。優秀な美術品を作るのは、固より美術家の責任でありますが、優秀な美術家を作るには又大に周圍の空氣が與つて力があるのであります。周圍の空氣なるものは、一國の文化の進度の如何であります。之は所謂擧國一致で、誰が作ると云へるものではない。美術家は美術に對して社會が冷刻だ、獎勵其他の機關が不備だと云ふであります。併し大きな一國と云ふことから云へば、獨り美術のみを獎勵すると云ふことも出来ないでありますから、美術をば世間一般が認めて、その必要を知るに到れば、自ら獎勵の機關も備はるのでありますから、我々美術家は、我々の本分を盡して、暫らく時期の到るを待つの外はないと思ひます。

我國の洋畫に就て考へて見ると、短日月の間に非常な變遷を経て居る。併し此變遷と云ふのが、矢張り歐羅巴の、特に佛蘭西の影響に依つて起つて來て居るものゝ様であります。その中心たるところの佛蘭西の美術には、古來動かすべからざる本筋の流れがあつて、そしてその流れには、殆んど時代といふものがなく、繼承していつて居

ますが、餘波といふか、支流と云ふかそれには變態が生じた。それは必しも本筋を無視したのではない。唯時代の要求に依つて、皮相の觀察即ち外觀が變つて居る併し美術の眞髓たる精神は失はない。此の點に於て美術家は大いに考へねばならない。時代といふことは、勿論無視することは出来ない。今日は丁髷に結つて往來を歩くことは出来ないけれども、日本的、武士的精神は洋服を着ても失つて居ない又失つてはならぬ。此のところでありませう。こゝが美術に於ても同じことで、外觀が如何に變つても、精神を失つてはならぬ。日本に於ての洋畫と云ふのは、餘程注意しなければならぬ。洋畫といはうが、日本畫といはうが、美術の精神に於ては何等變つたところはない、併し外觀に於ては異つて居る。佛蘭西に於ても矢張その通りで、幾多の流派が、時代に依つて生れて來ても、美術の精神は失はない。然るに日本に於ける洋畫なるものは、動もすると、精神を失つて外觀のみに囚はれる、それが爲に似而非なるものを生じ易い、又此の似而非なるものは外觀が稍似て居て精神の非なるものである。之は幼稚なる我國に於ては、兎角此弊は、獨り美術のみならず、各種の學問にもあることでもありますから、今日喧かましく云ふ所謂文化と云ふ上に於ては特に注意を要することでもあります。

文部省の美術展覽會といふのは、先づ日本に於ける標準的展覽會である。その展覽會に於ける洋畫と、今回の平和博覽會の美術館に陳列されたる洋畫とを假りに比較して見ますと、一得一失でありますが、今回の陳列は、平和博と云ふ大規模のものとしては、少し物足らぬやうにも感じられますが、之には多少の事情のあつたことで、遺憾な次第であります。併し作家は各人が皆なありのまゝの、肩の凝らない作品を出したと云ふことは、一寸面白く感じられる。先づ餘所行きでない。不斷着のまゝに出たと云ふ形に見える。特に多數の出品があつて、各種の

畫風が一堂に集つたといふことは、非常に愉快なことであります。

『大勢』一三 大正二年六月

大正二年三月一〇日から七月三二日まで東京・上野公園で開催された平和記念東京博覧会をふまえての所感。